第491号 昭和61年 5 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭 和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1986 年（昭和 61 年）
5 月 号（No. 491）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

ウェストンの来日第一報など
安江安宣……（1）
海外の山 ……（2）
「人の生命」「訪日するアメリカ登山家への提言」
秩父宮殿下のご手記 ……（3）
東西南北 ……（5）
「インド首相からのお手紙」他
図書紹介 ……（6）
「ダウラギリⅠ峰厳冬期初登頂報告書」「立山黒部奥山の歴史と伝承」「ウェストン関係の新資料」「自然保護のあゆみ」
報告 ……（7）
「山岳図書を語る夕べ（図書委員会）」「講演会（科学研究委員会）」「80周年記念トレッキング　黄土高原（俳句）」
会務報告・ルーム日誌・会員移動 ……（9）（10）
図書受入報告（図書委員会）…（10）（11）
お知らせ ……（11）
「氷河地形探索山行」他
カット／牧潤一，鈴木正俊

**▶日本山岳会事務取扱時間**
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

**▶図書室開室時間**
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

# ウェストンの来日第一報など

安江安宣

これまで日本初来時の行動がまったく不明であったわが国近代登山第一の恩人、W・ウェストン師は英国聖公会、教会伝道協会（C・M・S）派遣宣教師として英国P・O汽船ロンバーディ号の船客となり香港経由で一八八八年（明治二十一年）三月二十九日長崎に寄港、ついで四月一日神戸に上陸していたらしいことは昨年、川村宏氏（神戸の歴史、十二～十三号）により苦心の資料探索によってほぼ判明した。これについては島田巽氏もさっそく本誌四七九号で紹介している。

筆者は当時英国で発行されていたC・M・S機関誌であるChurch Missionary Intelligencer and Recordをさきごろ東京大学中央図書館において検討した結果、ウェストンの動静に関しわが国山岳史では知られていない新事実が二、三判明したので、取敢えず要点のみ報告したい。ちなみにこの雑誌は関東大震災で全焼した中央図書館復興のため英国政府からの寄贈文庫のなかにふくまれていた。

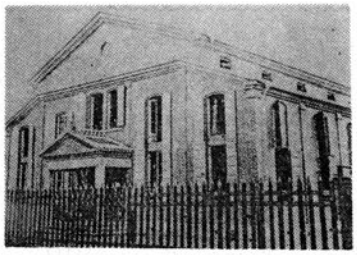
ところでウェストンが英本国から極東の小国日本へむけ出発したとされる一八八八年の一月号から逐次頁をくりだしていくと、まず眼にとまったのは同年三月号（N・S・十三巻）二〇五頁に同会所属宣教師海外出発欄日本の項にわずか二行、

『宣教師W・P・バンカム師夫妻とW・ウェストン師、横浜へむけ二月十日ロンドン出発』

とあるではないか！

また同年三月大阪において開催された在日本CMSミッション総会において英国聖公会日本伝道教区大阪地区会長であったH・エビントン師のおこなった一般報告のなかで

『…この度、新任地大阪に増加派遣されることになったバンカム、ウェストン両師の到着を心からお待ちする云々』の記事も同年九月号五九四頁にみることができた。



ウェストンが1888年（明治21年）6月16日来朝後はじめて講演した大阪土佐堀青年会館（大阪 YMCA 100 年史より）

まえの記事に横浜へむけロンドンを出発云々とあるのは両牧師の目的地が横浜であるという意味ではなく、当時英国P・O汽船極東航路定期船だったロンバーディ号の最終寄港地が横浜であることをさすものとかんがえられる。ちなみに同号はジャパン・ウィークリー・メイル紙の同年四月七日付をみると同日神戸から横浜に入港している。

なおもこのC・M・S機関誌の細かい活字でぎっしりつまっている頁をめくりつづけていくと同誌一八八九年（明治二十二年）五月号（N・S・十四巻）二九二～二九四頁には、遂にウェストンが同年一月三日まぎれもなく、熊本から発信した本部宛通信が三頁全一三一三語にのぼって報告されているのを発見した。これは彼が神戸上陸以来、大阪居留地をへて熊本でおこなった希望にみちた活動状況を精しくのべたもので大変興味ふかい。ただこの通信の後半におよぶと内容が純粋の基督教宣教の用語でつづられ、この方面には全く素人の筆者にとっては理解できないので、紹介を部分省略させていただきたい。

**ウェストンの通信第一報**

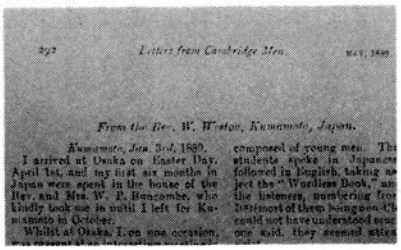
『一八八九年一月三日、熊本にて

私は四月一日（一八八八年―安江注）イースターの日に大阪に到着した。日本における最初の六ヶ月は、熊本へたつまで親切なバンカム師夫妻の住宅にやっかいになった。大阪滞在中には一度地元のYMCA主催の大ホールで開催された興味ある会合に出席したことがある。この会合は二週間に一回の割合でひらかれ、CMS神学校（大阪聖三一神学校―安江注）学生によるキリスト教の講義がおこなわれ聴衆の大部分は青年たちだった。三人の講師は日本語で、私は英語で「無言の書」Wordless bookについて演説した。

この会合の出席者数はなんと五〇〇から七〇〇名ほどに達し、その大部分はクリスチャンではなかった。したがって私どもの演説内容をどの程度理解してもらえたか甚だあやしい。とにかく実に静かに聴講したことは確かだ。

十月十五日（一八八八年―安江

お知らせ電話 234六六五九


292　Letters from Cambridge Mes.　MAY, 1889.

From the Rev. W. Weston, Kumamoto, Japan.

Kumamoto, Jan. 3rd, 1889.

I arrived at Osaka on Easter Day, April 1st, and my first six months in Japan were spent in the house of the Rev. and Mrs. W. P. Beaucombe, who kindly took me in until I left for Kumamoto in October.

Whilst at Osaka I on one occasion, composed of young men. The students spoke in Japanese followed in English, taking as ject the "Wordless Book," and the listeners, numbering fro 300 most of them being men. Th could not have understood mu one said, they seemed atte

ウェストンが1889年（明治22年）1月3日付，熊本からCMS本部へおくった報告

注）大阪をたち、長崎には二、三日滞在、同地でブランドラム師（本誌四八五号参照―安江注）と面会して連れだって熊本へ出発することにしたが、沿岸航路の便船の出帆が悪天候のためおくれ、結局十月廿一日の日曜日の朝長崎を出帆した。かなり荒れ模様の天気をおして実に得がたい体験をしながら、八時間かかって船は熊本にもっとも近い百貫沖に投錨した。おりから引き潮の加減で岸にちかづけず、私どもは連絡船をおりて、小さな二人こぎの艀にのりうつった。岸にむかってすすむこと一時間半、艀は砂洲にのりあげてしまったので、止むなくこれも捨てて砂泥に足をとられながら浅くなった海中を渡渉すること約三十分やっと百貫港に上陸することができた。ここから七、八マイル又あるいて熊本にたどりついたわけである。

熊本は周囲を標高四〇〇〇フィートの活火山阿蘇山などの山々にかこまれた盆地の水田平野の真ん中に位置している。熊本について最初の六週間ほどは宿舎がみつからず、ブランドラム師と彼の姉がすんでいた住宅にやっかいになった。

この街は十二年前に起った薩摩藩の反乱のため、戦火で家々を焼失、いま復興の真最中であって適当な借家をみつけることは非常にむずかしかった。ようやく或る小荷物運送会社の二階で寝室、居室の二部屋つきをみつけたが、階下は会社の事務室だった。

さて当地に到着以来、私はブランドラム師が英語を教えている或る男子学校で英語の授業を分担することになった。ここでは一時間の英語の学課のあと、一〇～一五分間聖書のレッスンがあった。生徒のなかには数名のクリスチャンがおり、ほか一、二名の洗礼志願者やキリスト教に興味をもつ者若干名。…』

# 海外の山

## 人の生命

「人の生命をどう考えているのか」

昨年十二月号のこの欄で、映画「植村直己物語」撮影登山隊の七人がエベレスト（八八四八㍍）に登頂、世界最高峰のてっぺんに立った人間が延べ二百人を越えたことにふれたが、七人のうちの一人、木本哲が「山と渓谷」誌五月号で、ふりしぼるような一文を書いている。

先に述べたように、木本は登頂後、単独では動けなくなったカメラマン阿久津悦夫に付き添って高所ビバーク、酸素ボンベも阿久津の不注意で落とされてしまい、両足とも重度の凍傷にかかった。ヘリコプターでカトマンズに運ばれ、東京で両足指をそっくり切断されるという不運に甘んじるのである。

「感慨なき登頂　マッキンリーからエベレストへ」と題したその一文の中で、三〇歳の木本は押えたタッチで、登頂からビバーク、翌日の下山に至る経過を記している。

「私が下るのはいましかない。いま下れば（先行の仲間たちに）すぐ追いつくだろう。そうすれば阿久津が死ぬこともわかった」

おそらくこの隊もそうだったろうが、高所での行動、とりわけアタックとなれば「自分のことは自分で」が昨今の登山隊の〝常識〟である。現に、木本の場合も、他の登頂者たちは他人をかまうどころではなく、自分が安全に下ることに精いっぱいだったと思われる。

しかし、近くに目が見えなくなり、動けなくなった仲間がいれば、別だ。木本は、「阿久津を残して下れ」との交信を聞きながら、四十七歳のカメラマンのために八千五百㍍近くでのビバークを覚悟したのである。

山で仲間同士が助けあうのは、当然、と誰でも考える。が、それでいてここのところは実に微妙なものがある。スピードが安全確保の一つと考えられている現在ではなおさらだが、誰でも自分の身の安全が一番気がかりだからだ。

長い間ザイルを組んできたパートナー同士であった場合や、リーダーが経験の浅い若手に対応する場合は、文句なしに、一方が弱ってくれば、どんなことでもして助けようと思うだろう。ただし、その結果一人を置いて下部キャンプに応援を求めることが多いのも、周知の通りである。

日本に限らないが、ヒマラヤなどの高峰登山では、「乾いた人間関係」とでもいうような、新しいメンバーシップが主流になりつつある、と思うことがある。いい、悪いではなく、そうした登山隊の方がドライな、思いきった山登りができるようなのだ。

そんな時代、木本哲というクライマーは、他人の生命のために苛酷な代償を引き受けた。好んでそうした、というよりは、そうしかできなかったと言うべきだろう。

阿久津はこの登頂で五大陸最高峰に登ったことになり、安全な場所へおりてからそのことを喜びと共に口にした。冒頭の「人の命をどう考えているのか」の一行は、それを聞いた時の木本のしぼり出された怒りである。

「植村直己物語」という映画がどんな内容であろうと、一人の男が十本の足指を失なった過程とその意味は全く別の視点で問われるべきである。

（江本嘉伸）

# 秩父宮殿下のご手記

## ―フリッツ・ストイリの案内人手帳から―

先の会報（四八八号）で触れたように、昨年秋、グリンデルワルトを訪ねたとき、数人の山案内人が所持していた案内人手帳をザミ・ブラヴァント氏の斡旋で見せてもらうことができた。今回はそれらのうち、フリッツ・ストイリの案内人手帳の中にあった、秩父宮殿下のご手記についてお知らせしたい。

フリッツ・ストイリも槇有恒氏とともにアイガーの北東稜を初登攀したので、彼の手帳もザミ・ブラヴァント氏の手帳と同様、日本人としては槇氏のものが最初に記入されていた。辻村伊助氏が同伴したフリッツ・ストイリとは別人のようである。

ページをめくっていくうちに、雍仁と署名のあるページに目がとまった。見覚えのある名前なのでこれを書きとめた日付を見た。この署名が私の知っているものなら八月に書かれているはずだったからだ。しかし、それは同じ年ではあったが、大正十五年五月二十四日となっていた。槇氏たちと登られた八月より三ケ月ほど前である。一瞬その署名に疑いを持った私は、すぐ隣に置いてあったザミ・ブラヴァント氏の案内人手帳をめくり、秩父宮殿下のご署名のあるページを開いた。そして二つを見比べながら、この署名が同じく秩父宮殿下のものであることを確認したのだが、その場では何故この五月二十四日に殿下がフリッツの手帳に、気軽にペンを走らせられたのか理解できなかった。

帰国後、このご署名のある写真を槇有恒名誉会員宛お送りしたところ、槇氏もまったく記憶にないとのことで、たいへん驚かれ、早速この写真を、槇氏の添書きと共に秩父宮妃殿下にお送りした、というお手紙を私は同氏から頂戴した。数日後、宮家からのお電話で、妃殿下もお驚きになったということを知らされた。

それから数ケ月後、宮家から頂戴した、当時の殿下のスイスにおける日程表を見ながら、私は麻生武治名誉会員とお話しする機会を持った。その結果、当時、殿下はアーノルド・ランについてスキーをなさっておいでだったこと、またランの所有するシャレー・ベルナにもお立ち寄りになったことが確かめられた。

『大正十五年五月二十四日

緑の草の中には紅の蘭、黄の桜

海外の山

（昨年、本会とアメリカ山岳会アラスカ支部との交流登山が行なわれたが、このときのアメリカ側の報告書が出たので、中村テル海外委員に訳して頂いた。ここに掲載するのは、エンビック副会長（当時）が、訪日するアメリカ人登山家への注意事項として提言した部分である。多少エンビック氏の聞き違いがあるように思う。**海外委員会**）

*

# 訪日するアメリカ登山家への提言

前アメリカ山岳会副会長
医学博士　A・エンビック

○米ドル現金を持っていき、空港で円に交換する。クレジットカードでは五%の手数料をとられるが盗まれる心配はない。地方では旅行者小切手は通用しない。

○余り沢山でなく、適当にスライドを持参し日本製のトレーを使うつもりでいること。コダックのドーナッツ型トレーは日本にない。

○乗物酔い止薬を持参すること。

○飛行機内用のため睡眠薬を持参すること。

○腱炎用にMorin（モーリン）を持参すること。日本では入手困難。

○医者が同行しているならコーチゾンを持参する。

○充分に休息をとり、見物も充分にすれば、体力の消耗はない。

○時間的余裕がないのに、目に入るもの全部を登りたいのなら、疲れた時のため、コーヒーを持っていくこと。

○アメリカのロックミュージックを聴けるが、なんとしても自分で運転をするのは避けなさい。

○公式の場合のためのドレス　アップを用意するが、君が登山家らしく見えれば九九%そのままでもよし。

○日本の裸風呂（屋内）と露天風呂（屋外）は素晴しい。しかし日本人は遠慮深いから混浴は期待しないこと。（×―訳者注、外国では温泉には海水着をきて入る）

○山小屋は寒いから、夜のために寝袋を持参すること。君が会う大部分の人はカラコルムやヒマラヤとかアメリカまたは豪州で登っていた連中である。

○何所でも同じように、教えてもらうルートはまあまあ普通で快適であり余計な用具は要らないが、地方の〝やり手〟や人気者と話す時は彼等は〝猛攻撃〟タイプであるので用心すること。

○マツタンウオールで見た手製のステンレススチールのボルトは優秀であるが、大体アメリカのより若干劣っているようである。

○日本でクレジットカードは通用する。

○外人（西洋人）は可成り自由に振舞えるが、勿論、日本の礼儀を多少知っていれば歓迎される。

○時間厳守、デジタル時計を持参すること。

○名刺を持参すること。

○七月、八月には日本アルプスに入れる。

○ロッククライミングは十月が最適。六月と九月は雨が降る。

○麻薬は持ちこまぬこと。

○変な食べ物を食べることになるが、もっとげてものを試めしたい時は彼等の冷い缶コーヒーを試すこと。

○君が使い慣れたバンドエイド、石こうとベンゾイン等の救急薬として一般に使われているのを持

海外の山

**山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう**

草、紫の龍胆が咲いている。そして白いアイガーの絶壁がその上に聳えている。その東北の尾根は君の永久に忘れられない記念だろう。これは僕がモンテ・リオネの登攀を試みて悪天候のため希望を達せずしてグリンデルワルトに帰った翌日、君の家から見た景色であり印象である。

カモシカ狩の話が出たとき君は愛銃を見せてくれた。そして「一年にカモシカを三、四頭より撃たない。多くを殺すことが憐れだから」と。何たる美しい言葉だろう。僕には君の心が「憐れだから一頭をも殺さない」と言ったより懐かしく感じられた。

アルプスの山、如何に僕の心を引きつけたことだろう。然しその裏面に君等山に住む人々の暖かい情愛が無限の力を与えているのだ。

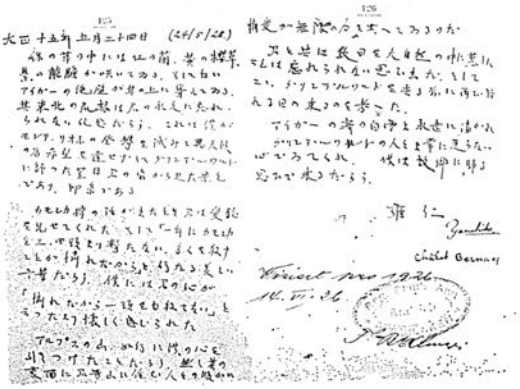
君と共に数日を大自然の中に暮したことは忘れられない思い出だ。そしてここグリンデルワルトを去る前に再び訪れる日の来るのを考えた。

アイガーの峯の白雪よ、永遠に清かれ。

グリンデルワルトの人々よ常に変らない心でいてくれ。僕は故郷に帰る思いで来るだろう。

雍仁
Yasuhito
シャレー・ベルナにて』

カモシカを撃って、それを生活の糧としていたスイスの猟師たちへの殿下のお思いやりは、当時のスイス人たちの心情とともに、現在のわれわれの立場に、何がしかの示唆を与えるもののように思える。文中、モンテ・リオネとあるのは Monte Leone というヴァリス・アルプスにある三五五三メートルの山で、氷河もある大きな山の一つである。八月の山行の前に、殿下が、すでに本格的なご登山をなさろうとしていたことが覗われる。この点については、麻生武治氏もかなり



フリッツ・ストイリの手帳にあった秩父宮殿下のご手記

海外の山

って行くこと。

○カメラの付属品を格安に手に入れようと思えば出発前にその品物の値をニューヨークで調べること。

○個人の家庭よりもホテルに泊る必要があると考えること、個人の家は大変せまい。ホテルの料金はそう高くない。

○旅行前にジェイムス・クラベルの「将軍」、エドウィン・ライシャワーの Japan, the Story of a Nation, F・マライーニの日本に関する本などは良い参考書である。Berlitz のフレーズの本も持って行くこと。

○特別な贈物として、たとえば、モルト　スコッチのジャック　ダニエルとか、それに似た何か民族的な酒を二びんくらいに、ちょっとした雑な小もの類を持つ。主人側への贈物として喜ばれる。

○スリッパは小さすぎると思うこと。

○ジェリー・モファトが心配したように熱いお風呂は足指のヒフを柔かくするが、大したことではない。次の朝には元通りになる。

○日本での問題はアメリカやスコッチのウイスキーは高い。（一びん九〇ドル）。解決策は国産のサントリーを飲むことで、一びん七ドルで、安くて、すごくうまい。

○一寸した正式の挨拶を日本語で覚え、先ず彼等の国語に敬意を表し、それから英語で話し始める。

**日本山岳会に就いて**

○約四〇〇〇人の会員がおり、うち一二〇人は女性である。

○入会手続には会員一名及び理事一名のサインが必要である。

○日本人はクラブに入会するのが相当好きであり、JACは信望があり、有名である。会員はアメリカ山岳会よりずっと年長であり、クラブ的傾向が強い。

○JAC会長は今西寿雄でマナスル初登頂者で、多分五十歳か六十歳である。

○日本人はアラスカ人より金持ちで、客をもてなすのにもっと金を使う。その理由は、会が大きく、会費は殆どわれわれのところと同じであるが、多額の会の金を使う主な刊行物や、クラブハウスがないからである。

○終身会員になるには五年間普通会員でなければならない。

○日本山岳会にはエリート族がおり、東京大学やその他の一流大学卒がふくまれて、アメリカ山岳会と同じである。ヒマラヤ山岳会（訳注・HMCとある）の会員は不釣合いな影響力を持っているらしい。

○JACは二名の副会長を持つ。

○JACはクラブペナント、クラブタイ及びクラブ章を持つ。

○JACはアメリカ山岳会よりももっと中央集権化している。ちょうどアメリカよりも日本がそうであるように。

**総　論**

○アラスカ支部のヴァルデズ・アイスクライミング祭は二月二十二と二十三日であり、松本正城とまき夫人とそして坂下直枝と田部井淳子さんたちも参加の意向をみせた。

○この訪問はやや格式ばったもので組織化されており、英国やポーランドとの交換登山のようなものではない。

○従来日本ではロッククライミングは登山よりもスポーツとしては遥かに危険とされていた。しかしこのスポーツのテクニックや用具類が発達し安全とされてきたので広く普及され、この考えは変って来ている。

○われわれは実業家、学者、運動具店、雑誌社、日本山岳会の上層部、ガイド、旅行業者、有名無名のクライマーたちと交流した。

○松本がアラスカに来る時は多分 Gasherbrum II

良く覚えておいでのようだった。このことはどなたの記録にも出ていなかったことで、私はたいへん驚いた。当時、殿下の周りの人々の驚愕の程が伝わってくるようだった。それに、このような殿下ご直筆の長文が、それもスイスの山案内人の手帳に残され、誰にも知られず、長いあいだ今日までそのままになっていたことも、その時代を知るものにとっては驚きだと思う。

このご手記を読みながら、その翌年（一九二七年）、殿下が穂高・槍ケ岳縦走をなさったとき、その山行について綴られた「山の旅」（『近き御垣』所載）の一節を私は思い出させられた。「登山は虚栄の表徴である下界の流行とは違ふ。登山は我々が赤裸々になって大自然の前に、幽遠なる理想を辿る崇高なる奮闘であり修養であり喜悦である。山そのものは久遠の生命であり大聖哲である。」（この文は一九二八年五月に The OSAKA MAINICHI から発行された小冊子に掲載されていたもの）

今回のグリンデルワルト訪問も、また、前回と同じように、何故か私の心に或る種のぬくもりを残す結果となった。それは一瞬にして冷めるぬくもりでなく、何か、連綿と、限りなく続くような……。

（岡沢祐吉）

## 海外の山

かまたは日本アルプスのスライドをアンカレッジかヴァルデズでみせて、彼の旅費のたしにするつもりのようである。ガイドする数名の客もつれて来るはずである。

○日本で Russ Clune のように自分で何でもしようとするのはむずかしい。言葉の障害が大きい。しかし、これはガイドをＪＡＣか今回会った連中を通して捜してもらえば解決する。或いはまた次回の日本訪問の際なんらか役に立つ参加者になることである。

○数名のアメリカ人が登山に日本へ行き、多くの日本人がこれまでマッキンレーに登りに来たようにロッククライミングに来ることが真のねらいである。何故ならこちらが絶好の登攀の場であるから。ルートはより長く、気候はずっと良いし、ロッククライミングの場所近くに住めるので、大部分の日本のクライマーのように、東京を出たり、帰ったりする時、週末のおそるべき交通渋滞にまき込まれなくてすむからである。

○円とドルのバランスではアメリカは日本人が経済的に容易に来られる所である。自分の国で一ヶ年かかるくらいのロッククライミングがヨセミテで二、三週間で出来るのである。

以上は私個人の下書き的原稿である。詳しく交換登山隊員の検閲をうけていないが、出来るだけ正確にと努力したが、誤りや抜けた点もあるかも知れない。この原稿を再読して、著者の間違いや、意見の相違点などがあればご指摘を願いたい。これはアメリカ山岳会や、アラスカ支部の公の意見を述べたものではない。

## 海外の山

# インド首相からのお手紙

伏見　紀子

山岳会に婦人懇談会が生れ、インド登山財団との交流が始って二十三年の歳月が過ぎました。

日本から二度の合同登山隊と八〇年にはケダルナートへ登山隊が向いました。この間にインドから当会にはエベレスト初登頂者のテンジン氏、オリンピックの頃はテンジン氏と故ギャルツェン氏の娘のニマさん、エベレスト計画の頃はエベレスト隊長のコリーご夫妻やゴンブ氏、そしてインド登山財団会長サリン氏の来日と続き、八一年には念願の友三名を迎え、第三回目の合同登山を上高地、穂高岳、立山、剣岳や関西旅行を婦人懇談会員とともに楽しむことができました。

昨八五年十一月、新首相のラジブ・ガンジー夫妻が来日されました。私は故インディラ・ガンジー夫人への追悼の気持を伝えたくて京都東山の都ホテルへ、電話で問い合せてから訪ねてみました。ものものしい警備の玄関ロロビーで二時間半程待ち、ようやくガンジーご夫妻が神戸からお着きになり、私たち親子の姿を認められたようでした。外務省、警察の方の面談の後、インド大使館の方を通してバラやコスモスの真白い花束と平和を祈る小さな鳩の置物にカメットの写真をお渡しすることができました。そして今年になってから、ロウで封印されたインド政府の手紙が届きました。首相の母上であるガンジー夫人に最初にお会いしたのは十八年前の六八年の第一回日印合同婦人ヒマラヤ登山隊の一員として参加し、カイラス峰に全員初登頂したあと、ニューデリーの首相官邸に招かれたときでした。翌六九年に国賓として来日された折、登山を通して数々のご親切を受けたお礼に初夏の野に咲くほたるぶくろの花束を芝白金の迎賓館にお届けに伺いました。そしてお別れのレセプションに招かれた思い出があります。七六年の第二回日印合同女子ヒマラヤ登山隊の時はカメットに向う前と、終ってから招かれ、紅茶とクッキーでのおもてなしにお孫さんも現れるくつろいだ雰囲気の中で、ヒマラヤの話をいたしました。インディラ・ガンジー首相の最後の来日は八三年でしたが、カメットに参加した麻生由紀子さんから花束を届けていただきました。

遥か海をこえ、彼の地の白き神々の座に憧れを抱く私達に登山許

PRIME MINISTER

New Delhi
December 17, 1985

Dear Michiko Fushimi,

Thank you for your card and the photograpl..

It was not possible to get in touch with the Japanese Alpine Club during my brief visit to Japan.

The Indo-Japanese Ladies Expeditions are a measure of the great friendship and cooperation that exists between our two ancient lands. I hope we shall scale many more heights together.

My good wishes to you and other members of your Club.

Yours sincerely,

Ms. Michiko S. Fushimi
Tsubaki Naotsu Setagawa 102
300-2 Hashimotocho-Seta
Otsushi, Shiga 520-21
Japan

ラジブ・ガンジー首相からの手紙

可をくださり、数々の便宜とご配慮をいただき、インド政府と登山財団に対して深く感謝しています。合同登山を通して、山と人とのさまざまなかかわりを持つことができましたことは、私の宝だと思っています。参加した日印両国隊員に二世が生れ育っています。今は育児に追われ山からちょっとはなれて中休みの時代です。次はいつ実現させることができるかわかりませんが、家事と言う単調な毎日にもヒマラヤへの夢を抱き続けていることを、合同登山に理解とご協力をしていただきました多数の会員の皆さまに、ガンジー首相の手紙と共にお知らせいたします。

ロッジ「峠」のいろりの上

## 第10回丹水会 例会予告

丹水会が小田急沿線の会から発展して、今年は10回目の例会を迎えます。最近は単に山行とともに、丹沢に関する学習会をひらいて、参加者から好評を受けております。

今回は、第10回を記念して、大山で集会を行い、『丹沢夜話』の著者であります、栄光学園の先生、H・シトルテ氏の外国人からみた丹沢の話を伺うべく交渉中です。参加は自由ですが、定員四十名ですので、早目にお申込み下さい。

一　日時　六月七日午後六時より
二　場所　伊勢原市大山「東学荘」
三　会費　宿泊共八〇〇〇円くらい

なお翌八日は大山沢遡行と尾根コースに分かれ、出来れば帰路、広沢寺温泉など計画しています。

申込先　海老名市国分一〇四九ノ一　古谷　聖司宛

## 山村正光氏に交通図書賞

昨年二月に刊行された山村正光氏の『車窓の山旅・中央線から見える山』は、もう広く知られているように大変好評で、多くの読者に熱狂的に迎えられた。昨年初冬には、新聞各紙に報じられたように新宿～小渕沢間に「山岳展望臨時電車」が二本も運転され、満員締切りで、乗りきれずにキャンセル待ちした人が数百人もいたという。その山村さんの著書が、このほど、財団法人交通協力会の主催する第十一回交通図書賞（第三部一般図書の部）を受賞した。同賞

## ダウラギリⅠ峰 厳冬期初登頂 報告書

北大山岳部・山の会編

一九八三年度朝日体育賞（朝日新聞）に輝いた、冬のヒマラヤ八千㍍峰登頂成功の公式報告書である。冬のヒマラヤ登攀時代を拓くことを意図して実施された当遠征は、永年寒冷と取り組んできた、いかにも北大山岳部らしい発想から生まれた登山といえる。

とはいえこの計画が北大内でもすんなりと進展してきたとは思えない。マイナス四〇度の極寒、低酸素、風速四〇㍍を越すジェット気流の荒れ狂う世界で、〝北大ならば、ひょっとすると成功するかもしれない〟という予感をたよりに参加した隊員もいたのではないか。それほど厳冬の八千㍍では凄絶な生存環境が予想されたが、現実はもっと厳しい烈風との闘いに始終した登攀であったようだ。

北大隊はその環境を克服すべく、ここ二十数年来ヒマラヤの冬季登山に関する科学的資料を集め、登高の技術的経験を積み重ねた上で、今回の遠征に当っては、一、ヒマラヤ登山では異例の全キャンプの雪洞利用、二、頂上まで一～二日で往復できる高度で長期間粘るための高度順化と物資の集積、三、稀少なチャンスを捉えて、迅速に登頂するために、科学技術を高度に利用した気象予測、の三点を実践し徹底した持久作戦をとっている。

その結果、自然の猛威の緩む時期を科学的に予測し得て、ほぼ狙い通りの作戦展開で見事に成功した快心の登山といえよう。

この登山は並の人間の生存環境ギリギリの限界域で行なわれた極限登山の貴重な事例である。厳冬期のヒマラヤ八千㍍峰は、人間の能力よりも自然の猛威の方がはるかに強く、まともにぶつかっても勝目はないが、天・地・人に万全の体制を敷き、その厳しさの緩むチャンスを捉えて、一気に速攻をかけるやり方が登頂の可能性の高い登山方法の一つであることを北大隊は示してくれた。

本書はまた、登頂成功の要因となった事項を「調査と研究」の章で詳しく述べており、いずれの項目も登攀に直接関与した事柄だけに読みごたえがある。ヒマラヤを目指す人達の必読の報告書の一つといえる。

B五版、二〇四ページ、カラー写真二二ページ、英文抄録、地図付。（株）講談社出版サービスセンター刊。領価五〇〇〇円。（山本良三）

## 立山黒部奥山の歴史と伝承

広瀬　誠著

本書は著者の三十年に亘る総合的な山岳研究の内、特に立山を中心にして周辺の剱、薬師、黒部、後立山附近の古代史、山岳信仰、民俗、伝承、登山史、山名考、文献考など、特に山に深く関するものを選び、〝立山信仰の歴史と伝承〟から〝岳中岳麓踏査と紀行〟までの十三章にまとめたものである。

わが国の歴史に立山が劇的に登場するのは戦国時代の佐々成政の佐良佐良越えであろう。この史実については「太閤記」始め種々の書物に採り上げられているが、著者は本書に依って成政の行動の時期、ルート、季節、回数などに違いを生じていることを見つけ出し、いちいちその文献の名前をあげ比較検討し考証を加えている（第四章）。筆者も今まで佐々の佐良越えは天

は、「交通に関する優秀な図書を選定し、交通知識の普及と交通従事者の教養の向上に資する」ことを目的として年一回おこなわれているもので、三月二日付の交通新聞紙上で受賞が発表された。受賞式は三月十二日、東京丸の内の日本交通協会特別会議室でおこなわれ、著者山村正光氏に賞状と賞金が贈られた。

## 会員通信

「十五年来の念願叶いまして、九山先生の茅ケ岳へ登ってきました」

その折の句

「春山にして悲しみの茅ケ岳　秋草子」

（会員南平吉氏より）

●報告●

## 第七回山岳図書を語る夕べ「山岳写真の流れ」

講師　白簇史朗氏

図書委員会主催

第七回山岳図書を語る夕べが、二月十五日（土）、韓国の取材から帰国したばかりという写真家、白簇史朗氏を迎えて行なわれた。

白簇氏は、昭和五十九年に南アルプスの麓、奈良田に町立「南アルプス邑白簇史朗山岳写真館」を開設されたが、個人的なギャラリーは現在世界に四つしかないとのこと、ちなみに他の三つとは、アンセル・アダムス（ヨセミテ）、ヴィットリオ・セルラ（北イタリア）、土門拳（酒田）である。

「山岳写真の流れ」と題して、約二時間にわたって行なわれた講演の、以下はその要旨である。

＊

世界で最初の写真家と言われるのは、ヴィットリオ・セルラ（一八五九年北イタリア生れ）であるが、彼の祖父は世界で初めて写真技術テキストを書いた人で、おじはイタリア隊のヒマラヤ遠征隊長を務めた人である。しかし写真集が三冊くらいしか出ていないところを見ると、いかに山岳写真がペイしないものであるかの証明であるような気がする。

日本の場合を見ると、明治から大正にかけての、「高山深谷」（高野鷹蔵・日本山岳会）は、台紙に一枚一枚貼って製本してあり、完全な手作りである。セルラの例と共に、これらを考え合わせると、山岳写真集を出すことの難しさがわかるような気がする。

昭和七年に長谷川伝次郎の「ヒマラヤの旅」（中央公論社）が出るまで写真集らしきものは出ていないし、また僅かに出たものをみ

**図書紹介**

正十二年十一月だけとばかり思い込んでいたので―隠れた行動だけに色々憶測も生れようが―これ程諸説があることを知らされると、改めて歴史の面白さと定説を引き出す難かしさを教えられる。

〃近代登山と小杉復堂〃（第六章）は地元富山の隠れたる登山家で、日本山岳会創立以前、ちょうどウェストンと同時代に立山、白山、乗鞍、御岳、白馬等に登ってその登山記を漢文で発表した復堂の人と足跡を初めて詳しく紹介したものである。小杉復堂に関しては、山崎安治著「日本登山史」や安川茂雄著「近代日本登山史」に略述されているが、それらの記事は本稿が最も重要な参考文献として使われたことであろう。「復堂遺文」は復堂没後の昭和五年二月に私家本として刊行されたもので一般の目に触れがたい。近代登山の幕開けを演じた一人を世に出し、合わせて登山記を現代文に直して紹介した功績は大であろう。

この厖大な内容の全てを短かい文章で紹介することは出来ないが、その他では本書の巻頭を占める、立山と薬師岳の山岳信仰、剱岳、黒部、立山山脈、後立山山脈の地名山名考、まぼろしの刈込池を文献上から探究した、〃水と火〃（第八章）〃山の古文学と文献考〃（第十章）など郷土資料を縦横に駆使した密度の濃い内容で興味深く読むことが出来た。

## ウェストン関係の新資料

『主の御名によりて』と題する横浜聖アンデレ教会百年史が、逗子聖ペテロ教会の垣内茂・司祭から、日本山岳会に恵贈された。この横浜の教会は、ウォルター・ウェストン師が、第二次来日（一九〇二―〇五年）の三年間、親しく伝道にあたった処なので、本書の一八ページから二一ページまでの間、あちこちに同師の行動が記録されている。

それ以上に注目したいのは、別に外史篇として垣内師が「百年史にとらわれず、もっと広い見地から」ウ師について史稿を執筆されている部分である。（一二九―一三八ページ）その執筆の意図は、説明を加えるよりも、垣内師の強調されている点を、そのまま引用する方がよさそうである。

「教会外、殊に山岳関係者の間での知名度に比し、従来教会内ではウェストンは余り高く評価されていなかった面も多分にあったのであるが、本稿が少しでもウェストンへの従来の評価を改める契機ともなればと願うものである」

垣内師はこのような観点から、ウ師の第二次来日実現までの経緯を記すとともに、聖アンデレ教会新築に尽力したウ師の功績を中心に、永年の地道な調査にもとづいて、新しいウェストン像を描こうと努められた。その結論というべきものは、次の一節に要約されている。

「ウェストンを〃宣教をおろそかにして山歩きばかりしていた駄目な宣教師〃と評価する根拠は、横浜聖アンデレ教会での働きに関する限りあてはまらないのである。彼は生来の弱視という障害があり、また健康ノイローゼのような気質もあり、また肝心の日本語は余り上手ではなかったらしいこと等の欠点だらけの人物であったかも知れないが、また日本人信徒との間に意思の疎通を欠いた衝突もあったかも知れないが、むしろ器用さとは無縁な生真面目な面をもっていた人物ではないかと推察されるのである。彼もまた彼なりに日本を愛し、日本聖公会の宣教の業に寄与した神が派遣した宣教師の一人で

昭和五十九年十月十八日発行
桂書房刊　六三五ページ　付図一葉　九八〇〇円

（岩瀬晧祐）

**図書紹介**

ても、文章が多くて写真集というのには少し首をかしげたくなる。ヨーロッパでは現在も同様の状態にあるとみえて、フランスで「ヨーロッパアルプス」を出した時、山岳写真ばかりだったので現地の人々は驚いたようだった。

日本の山岳写真家で一番印象を受けたのは岡田紅陽先生の「富士山」（昭和十五年・アルス）だった。先生の「富士山」には、風景のうしろにあるものの本質を凝視する目が感じられた。これは、アンセル・アダムスの写真にも感じられることであった。

私が岡田先生の内弟子として入門して十一年目の昭和三十七年に、私は山の写真一本でゆこうと決心した。今から思えば残念な気もするが、当時生活のために業界紙の仕事をしながら、金が溜ると山へ入るというような生活をしていて、有名な政・財界人のポートレートや、ボリショイバレエなどの舞台写真も数多く撮っていたが、独立宣言する前夜、それらのフィルムを全部鋏で切って、後戻りできないように、自らを背水の陣に追い込んだ。しかし本格的な写真集が出るようになったのはそれから八年後である。

山岳写真の需要は微々たるもので、「山と高原」、「岳人」、「山と渓谷」、「アルプ」などで発表し、たまに「ベースボールマガジン」が夏山の特集を組むという具合で、これで生活してゆくのは不可能な時代だった。

様々な場所の写真を撮れ、と言われたが、撮りにくい南アルプスをマスターできれば、北アルプスも簡単に撮れるのではないかと考えて南アルプスに専念した。予想通り南アルプスは撮りにくく、行き詰ってしまって、尾瀬に目を転じた。南アルプスと全く異なる地域で互の魅力や特性を比較、対照してみた。小さな尾瀬の小さなモチーフを如何に捉え、表現するかを通じて、逆の大きな南アルプスを大きく表現することをマスターしようとした。

「名峰日本アルプス」（昭和五十七年・山と渓谷社）は、南、中央、北アルプスの全ピークの四季を網羅したものであるが、南アルプスをやったのだから当然北アルプスもやらなければならないと考えていた。北アルプスを撮っている写真家は多いが、北アルプスだけで一つに纏めた人はいなかったので、どうせやるなら全域を、ということで北アルプスと取組んだ。

山岳写真は特殊な位置にあり、写真家の中にあっては、〝鬼っ子〟のような存在だと思う。

他の分野の写真家でも山に登る技術があれば良い写真を撮ることができるのであるが、山岳写真家の中には「山の技術を持ったわれわれにしか山の写真は撮れない」という思い上りがあり、構図的にいいものは少なく、スナップの世界になってしまっている。現在の構図法を無視して、自分勝手な構図を作り上げている。表現しようとする山、自己の心をどのように出すかは、構図がない限り表現できるはずがなく、また現在それが非常に少ないと言えるのではないかとの思いがある。これは自戒しなければならないことだ。

カメラ器材や、印刷技術などあらゆる面で現在の私たちは先人よりずっと恵まれている。この恵まれた中で、地球の持つエネルギーといったものが表現できていないとすると、それは自己の腕の問題となる。現在は少しカメラに頼りすぎているのではないかと思う。

日本のような土壌からは、山岳写真というのはもっと開花するのではないかと考えているが、その点、田渕先生の「尾根路」（昭和三十三年・朋文堂）、「高山蝶」

## 図書紹介

った」

＊

なお垣内師の史稿中に、はじめて公開されるウ師の肖像写真が見られる。一九二一年（一九一一年と印刷されているのは誤り）四月ころ、ロンドン港在泊中の日本郵船クライスト号（後に吉野丸と改称）上で乗組通信士の東海林定一氏と並んで立っているウ師は、六十歳の英姿ということになる。この時はマルセーユまで一緒だったと語る東海林氏は、現在八十七歳、宝塚市にご健在で、ウ師との出会いは、この写真撮影の直前、ロンドン港の日本人船員のためのミッションに赴いた時であったと回想される。

東海林氏はウ師と同じ聖公会に属し、船員生活を定年で去られた後は、もっぱら宣教に従事されたので、ウ師が日本の山の先蹤者であることを知ったのは、横浜教区に勤めるようになってからで、この写真撮影後四十五年目のことだったという。

＊

他にも紹介したい挿話はあるが、本書は本会図書室に備えるので、ご披見を願うことにしたい。なお本書の入手を希望される向きは、左記へ申込んでいただきたい。

〒221横浜市神奈川区三ツ沢下町一四―五七
日本聖公会　横浜聖アンデレ教会内　瀬川義夫氏宛
（送料こみ一冊一千円で領布の由）

（島田　巽）

### 自然保護のあゆみ

日本自然保護協会三十年史編集委員会　著作

その最初から、自然保護という労多くして、なかなか成果をあげられぬ思想と運動に、努力してきた私としては、物足りぬ点もあるが、ともあれ、三十年の歴史と資料がまとめて発刊されたことは幸いだった。

戦後の日本の自然保護行政、一般市民の自然意識や運動の移り変わりがよく捉えられている。自然保護を長年、総合的かつ全国的な視野で見つめ、実践してきたからの結果で、発起人の一人として感銘ひとしおである。

日本山岳会の自然保護委員会も、当時の会長松方三郎さんと計ってまとめ、わたくしは日本自然保護協会と密接に連絡をとった。穂高岳のロープウエイをウェストン像のそばへ下ろそうとした問題を、現状の飛騨側のみに止めたのも、屋久島の三千年の老松の伐採を制したのも、その一、二の例である。このごろは、その結びつきが薄くなっているが。

山を愛する者のホームグラウンドである自然は、何としても保護せねばならぬ。この書によって歴史を知り、今後の参考にしてほしいと思う。

昭和六十年五月三十一日、日本自然保護協会発行、定価二八〇〇円

（村井米子）

図書紹介

（昭和三十四年・朋文堂）などを見ると、ますますその感が深い。特に「尾根路」を見て新鮮な驚きを感じた。先生は高山蝶の研究をするかたわら、山岳写真を撮られている。山岳写真というものは、多くの苦労をしなければ、人に見せられる程のものは撮れないという宿命を抱えているが、そういう苦労を通して、なお質の高い物を見せているのが「尾根路」である。

中央アルプスで遭難した横田祐介氏の遺志を継いで、「日本山岳写真集団」を結成したのは、昭和四十一年だった。十周年を迎えた年、創造する人たちが、歴史を云々すればお終いだと考えていたので、その年評議員に退き、五年後には脱退した。

私たちは多くの先人たちが作った階段を登って仕事をしているが、後に続く人のために、その階段の一つになればと思う。そのためにも階段はできるだけ高いものにしておかなければならない。

現在、あと何年山に入れるかと考えると心細くもなるが、常に大きな計画を立てて、自分自身を追いつめた状態に置くため、様々なプランを考えている。

山の写真を撮ろうと決心した日から数えると、二・五日に一度の割合で延べ三千八百日以上は入山している。今から五千日以上入れるかどうかわからないが、山に入れば入るほど、やってゆきたいことの奥へ進めるのではないかという気がする。できれば六千日でも七千日でも体力の許す限り入山したいと思う。（記録・泉久恵）

講演会

「北アルプスにおける自然エネルギーの利用」

科学研究委員会主催

昭和六十一年一月二十三日（木）午後六時半～八時半　日本山岳会ルーム

講師　幾徳工業大学　鳥居亮、重村清、森武昭、穂高岳山荘今田英雄

幾徳工業大学の方々と穂高岳山荘との協同研究による風力、太陽光などのエネルギー利用による発電を中心とした実験報告をスライドを中心に、エピソードや苦心談を混えて話された。すでに「山岳（第八十年）」に主要な内容は掲載されているので、それを参照して頂きたい。平地の場合と異なり、荷上コストの高い山小屋の場合は、近い将来に太陽電池の利用がコスト的にも引合う見通しがある由で、今後の研究が期待される。

**出席者（順不同）**　関清、竹中敏郎、岩佐吉雄、山岸猛男、平戸孝夫、河野幾雄、今田英雄、鳥居亮、重村清、赤松光、大塚玲子、中村純二、梅野淑子、中川和道、古谷聖司、平柳一郎、高遠宏、千葉重美、入沢郁夫、神憲明、石井恵美子、斎藤かつら、大木淑子、滑志田隆、原謙一

（高橋　詢）

## 会務報告

**三月理事会**

3月12日午後6時30分　場所　本会ルーム

**出席者**　今西会長、山田、大塚副会長、鴫原、橋本、大橋、松永、浜口、梅野、高遠、鈴木、新井、村木、太田、絹川、平井、関塚各理事、竹田監事、松田、宮下、中村各評議員、

**委任**　岡沢理事、金坂監事

**審議事項**

○昭和六十一年度事業計画（案）承認の件　原案承認

○昭和六十一年度収支予算（案）承認の件　原案承認

○総会日程、昭和六十一年五月十六日午後六時より、場所・番町グリーンパレス　了承

**報告事項**

○名誉会員交野武一氏二月十三日死去

○集会委員会・東九州支部との合同ヒンズーラージ踏査後援

○坂本直行氏遺作展後援

○新入会員オリエンテーションを三月十五日、本会ルームで開催

○委員会報告として、山研、図書、フィルム、山日記、自然保護、指導、海外、学生部指導、集会、婦人懇談会、高所登山の各委員会から、行事結果、予定、現在の活動等についての報告があった。

## ルーム日誌　三月

5日（水）　海外委集会、常務理事会
10日（月）　ニュージーランドの山の話
11日（火）　婦人懇談会、図書委
12日（水）　理事会
13日（木）　山岳史懇談会
15日（土）　新入会員オリエテンーション
17日（月）　山岳博物館を考える会
18日（火）　婦人懇談会セミナー
20日（木）　会報編集委
24日（月）　総務委
25日（火）　自然保護委、婦人懇談会
26日（水）　フィルム委
27日（木）　高所委
28日（金）　ポーランド打ち合せ会

今月の来室者482名

**会員移動**

支部変更

7375　常盤　峻士（宮城→他へ）

退会

8369　桐原　敏男
7740　松崎　哲也
6844　間庭　秀紀
8482　大音師忠一
8709　野畑　浩之
8873　大下　幸二
9305　岩渕　栄子

**80周年記念トレッキング**

### 黄土高原　～黄河源流行～

西瓜喰ふ火車の旅の煤け貌
犛牛追いて日月峠夏ふかし
蜂飼に海坂のごと湖照りぬ
菜の咲きて青海湖畔秋立てり
地平まで黄土高原麦熟るる
旱野に崑崙の雪遥かなり
夏炉辺に臥して不覚の高所症
茫漠の野に秋水や瑪多橋
遊牧の笛嫋々と夕焼け冷ゆ
真夜醒めて高度順化の天の川
寝袋の灯蛾払ひ捨て明易し
鳴き兎覗く薄雪草摘めり
経文石の崩えて乱るるお花畑
湖ひらく花野の丘に喇嘛の旗
翅おもき黄土のいろの高嶺蝶
雲触るる花野に渉る黄河源

1985. 8. 9～23　小林　碧郎（馬酔木同人）

## 図書受入報告

図書委員会

**昭和 60 年 10 月分受入図書**

1. 吉野光子　小川雅子共著「花のハイキング　ヤビツ峠篇」八紘社　1985（大島民義氏寄贈　2冊）
2. 弘前大学理学部付属雪害観測所編「弘前大学理学部雪害観測所報告　第4号」弘前大学理学部付属雪害観測所　1985（版元寄贈）
3. ラインホルト・メスナー著「チョモランマ単独行」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
4. 山下喜一郎著「山下喜一郎山岳写真帖」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
5. ネパール・国土地理院山の会合同登山隊編「カリョルン冬期登頂，高所順応トレーニングについて」ネパール・国土地理院山の会合同登山隊　1985（版元寄贈）
6. 富山県山岳連盟 '83 ナンガパルバット登山隊編「ナンガパルバット登山報告書　1983」富山県山岳連盟　1985（木戸繁良氏寄贈）
7. 島田巽著「山稜の読書家」茗渓堂　1985（版元寄贈）
8. 小倉厚著「新北越雪譜物語」岳書房　1985（版元寄贈）
9. 吉野あつ子編「稜線　追悼吉野寛」吉野あつ子　1985（編者寄贈）
10. 森谷虎彦著「無名山岳会登高記録」エルムコンサルタンツ　1985（佐々保雄氏寄贈）
11. 古原和美著「ヒマラヤの旅 未知をたずねて」理論社　1975（版元寄贈）
12. 藤木九三著「岩登り術」R・C・C 事務所　大正 14（高野岳雄氏寄贈）
13. 小島烏水著「山の風流使者」岡書院　1949（高野岳雄氏寄贈）
14. 小野敏之他編「山書研究　第4号」日本山書の会　1965（高野岳雄氏寄贈）
15. 別所梅之助著「石を積む」警醒社　1931（高野岳雄氏寄贈）
16. 京都帝国大学白頭山遠征隊「白頭山　京都帝国大学白頭山遠征隊報告」梓書房　1935（高野岳雄氏寄贈）
17. 小林義正著「山と書物」築地書館　1957（高野岳雄氏寄贈）
18. 石川欣一著「山へ入る日」中央公論社　1929（高野岳雄氏寄


山岳関係図書案内

小島烏水全集
全14巻／別巻1
編集委員＝島田巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行
第13回配本 ⑭江戸末期の浮世絵ほか〈近刊〉
❶初期文集　❷「文庫」時代(一)　❸「文庫」時代(二)　❹山水無盡蔵　不二山ほか　❺日本山水論　山水美論ほか　❻雲表　日本アルプス（第一巻）　❼日本アルプス（第二巻・第三巻）　❽日本アルプス（第四巻）ほか　❾氷河と萬年雪の山ほか　❿書斎の岳人　アルピニストの手記ほか　⓫偃松の匂ひほか　⓬山の風流使者ほか　⓭浮世絵と風景画ほか　別巻　小島烏水研究
定価6,800円～9,800円

図説百科
山岳の世界
N・ディーレンファース、T・ヒーベラー他著
日本語版監修＝西堀栄三郎・宮下啓三
B4変型判・上製函入・310頁　定価18,000円

遙かなりエヴェレスト
―マロリー追想―
島田　巽著
四六判・本文10ポ組・フランス装・292頁　定価1,500円

野鳥の本
野の鳥の生態　全5巻
仁部富之助著　藪内正幸挿絵　定価各1,400円
素描集　野の鳥たち〔ある画家のフィールドスケッチ〕
画＝C・F・タニクリフ　日本語版監修＝高野伸二　定価6,800円
森と私とフクロウたち
クレア・ローム著　蛭川久康訳　定価1,300円

大修館書店
●図書目録呈
〒101東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294-2221〈大代表〉

贈）
19. 山梨県山林会編「南アルプスと奥秩父」改造社　1931（高野岳雄氏寄贈）
20. 高畑棟材著「山を行く」朋文堂　1930（高野岳雄氏寄贈）
21. 小林義正著「山と書物」築地書館　1960（高野岳雄氏寄贈）
22. 岡村利平著「飛騨山川」住伊書店　大正15（高野岳雄氏寄贈）
23. 高畑棟材　河田楨著「東京附近の山々　時間記録と費用概算」朋文堂　1931（高野岳雄氏寄贈）
24. 河田楨　高畑棟材著「奥秩父と其附近　時間記録と費用概算」朋文堂　1931（高野岳雄氏寄贈）
25. 諏訪多栄蔵他編「現代登山全集　1　日本の山と人」創元社　1961（高野岳雄氏寄贈）
26. 日本山岳会編「会員名簿」日本山岳会　1941（高野岳雄氏寄贈）
27. 日本山岳会編「会員名簿」日本山岳会　1952（高野岳雄氏寄贈）
28. 日本山岳会編「会員名簿」日本山岳会　1957（高野岳雄氏寄贈）
29. 工房峠の会編「九重山　加藤数功遺稿集」1985（東九州支部寄贈）
30. 西沢憲一郎著「ネパールの歴史」勁草書房　1985（西沢憲一郎氏寄贈）
31. 加藤保男追想録編集委員会編「加藤保男追想録」加藤保男追想録編集委員会　1985（加藤保男追想録編集委員会寄贈）
32. 岩沢正平著「日本の名峰　7　磐梯・吾妻・那須」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
33. 富山県警察山岳警備隊編「ピッケルを持ったお巡りさん」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
34. 斎藤晋著「尾瀬」上毛新聞社　1985（斎藤晋氏寄贈）
35. 西田高生著「日本の名峰　20　立山・剣・薬師」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
36. 蜂谷緑著「ミズバショウの花いつまでも，尾瀬の自然を守った平野長英」校成出版社　1985（蜂谷緑氏寄贈）
37. 鳥海山の自然を守る会　白神山地のブナ原生林を守る会「ブナ林を守る，鳥海山と白神山地からの報告」秋田書房　1983（福田文二氏寄贈）

**11 月分受入図書**

1. 多田繁次著「低山遍歴　神戸近郊の山々」神戸新聞出版センター　1985（多田繁次氏寄贈）
2. 多田繁次著「兵庫ふるさと散歩　9　北神戸の山やま」神戸新聞出版センター　1982（多田繁次氏寄贈）
3. 芝浦工業大学山岳部・OB 会部報編集委員会編「芝浦工業大学山岳部部報　第1号」芝浦工業大学山岳部・OB 会　1985（版元寄贈）

（以下次号）

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

## ◉ 氷河地形探索山行

恒例の探索山行、今年は日本の氷河地形を探りに中央アルプス千畳敷カールに出かけ、特に論議の的となった稜線付近の地形など、新会員の大正大学有井琢磨教授に説明を伺う予定です。精々ご参加下さい。参加希望者は氏名、会員番号、年令、男女別を明記の上、六月二十日までにハガキで事務室宛申込んで下さい。

記

一、集合　昭和六十一年七月十二日（土）后四時、千畳敷山荘
　その日はお話と懇親会
一、解散　七月十三日（日）千畳敷ケーブル駅、后三時
一、費用　約六千円（無断乃至直前不参加の場合千円徴収）
一、詳しい内容は申込者宛六月中に直接お知らせ致します　以上

科学研究委員会

## ◉ ポーランド登山隊 在日中の行動予定

5月21日　先方の都合でこの日に来日となりました。
5月25日（日）　富士登山、富士スバルライン入口に参加者（申込者）は午前一時集合
5月27日（火）　日体協301号室でシンポジウム。十八時から約二時間。進行池田常道、日本側パネラー坂下直枝他二名。会員以外の出席も大歓迎。
5月28日（水）　あずさ7号で松本経由上高地山研へ
5月29日（木）～31日（土）　涸沢にて幕営による合宿。穂高岳などの登山。会員各位は事務局へ連絡、申込みのうえ現地で合流することができます。
6月1日（日）　ウェストン祭に参加。国際アルピニスト大会のオープニングです。会員の現地自由参加大歓迎です。
6月2日（月）　講演と映画の夕を会場新宿安田生命ホールで行ない、ポ隊の「冬期ヒマラヤ登山の記録」を上映。講演はザヴァダ隊長、原真、高橋和之の諸氏。チケット千円。
6月3日（火）　帰国に当っての交歓「歓送会」を私学会館で十八時三十分より、会費五千円で行ないます。（酒持込歓迎）

ポ隊歓迎実行委員会

**訂正**　前月号会報（四九〇号）の三ページ上段左から一五行目に「カシンフェイス」とあるのは「カンシュンフェイス」の誤りですので、ご訂正をお願い致します。

昭和六十一年五月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西寿雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇
ABビル
印刷所　株式会社　技報堂

スイスの有名
ピッケル
ベンド
輸入しました。
〒114 東京都北区豊島4-12-1
つゝ美　03-914-3240